

米国における能楽研究の実態と

私の能狂言を中心とした演出活動（8）

—一九六〇年代から20世紀の終わりまで—

アンドリユー・T・椿

E. 前項の「清水」と「藤戸」公演を補足して

前号で書き落とした「藤戸」に関した一点がありますので、それを先ず取り上げます。能を勉強しそれを公演するに当たって、一般の人が能を勉強するのと違う、大事な一点があるわけですが、それは能に必ず出てくる脇役の存在です。狂言の登場人物は仕手、アト、小アトとなりますが、この役割が能ではシテとワキになります。狂言の場合は狂言をやるシテ方が、シテもアトも自分の組織の中で育て訓練しますが、能の場合にはシテはシテ方、脇はワキ方の組織の中で育て、それぞれのグループで育てられた人がその役を勤めます。こうした仕来りがあるので、「藤戸」の勉強を四郎師に教わり始めたときに、ワキの動きについては脇方の宝生欣哉さんに教えてもらいなさいということで、

狂言ではなかった能特有の新しい慣習に遭遇しました。

幸い欣哉師は事情を了解して下さって、丁寧に必要に応じて時間を掛けて教えて下さいました。考えてみれば、シテ方は舞台でワキと一緒にの場面に出ることもありませんが、ワキはワキだけで出ていて、シテと関係のない場面もあるわけで、私のように演出をする身で能を勉強するのところが、シテが総てワキの動きを知っているわけでないという当たり前のことを、始めて了解した次第です。

F. 一九八五年から八八年まで——私のヨーロッパを含めた演劇活動

1. 一九八五年から八七年まで

さて「清水」と「藤戸」の公演の後で、次の能狂言の公演は、一九八八年になって三つの狂言を手がけ、米国の東部や中部にも旅公演をしたりしたのですが、八五年から八七年までの二年間に何をしていたのか、少し脇道にそれますが、私の演劇活動と言う視点から見れば、当然それなりに私にとつては大事な、新しい経験をいろいろしてきましたので、それをここで取り上げたいと思います。私にとつても全く新しい経験の連続でしたが、それはヨーロッパでの、特にギリシャ、そしてサイプラスでの演出に関係した仕事をいろいろした、大変私にとつては、英語でいうと、チャレンジ (challenge) の多い年 (あれこれ私の実力を大いに発揮すべく新しい仕事を次々と与えられた期間) だったと言えると思います。更に、サイプラスの仕事の後で、東ドイツ (ベルリン)、チェッコスロバキヤ、ポーランドと旅を続け、思いがけない珍しい経験をいろいろしました。

人間一人の人生は、ある時限で予期した通りに行くこともあるかと思いますが、仕事先が変わったり、新しい友人との仕事の関係などで、思いがけない時に、全然考えたこともないようなところに行つて仕事をする事になったり

して、それはそれなりに予期しなかったために、興味深い経験をすることになると思います。私とギリシャの関係は、そうしたことの良い一例かと思えます。

2. ハウス博士との出会い

ギリシャの古典劇は米国で博士課程の演劇を勉強すれば、何回も巡り会う相手であり、演劇史のクラスではエジプトと並んで、古い石造りの広大な野外の二万人は入るといふ劇場や、宗教的な含蓄のある劇場の造られ方（例えば神に供え物をする、貢ぎ物をおく棚が、舞台の中央客席のすぐ前に備えられている）、戯曲を読むクラスでは、勿論ギリシャから始まり、そのエスキラス、ソホクリス、ユーリピデスなどの作品を勉強し、始めは簡単な劇構造を持った話（が、だんだん登場人物が増え、話も込み入ってきて、複雑になり、単なる神話から複雑な人間関係を持った話になっていくところを勉強していきます）。

私がギリシャ劇（学問的なギリシャ劇との関係とは違う、もっと人間的な関係とでも言いましょうか）と深まった繋がりを持つようになった最大の理由は、オハイオ州の大学から、一九六八年にカンサス大学に移って、国際演劇と言う視野の広い分野を専門とする仕事にかかることになり、一九八五年にカンサス大学のドイツ語文化科に訪問教授と言う形で、東ドイツの例の有名な演劇人であるブレヒトに若い頃仕事を手伝わせたという、ハインツ・ウベ・ハウス (Heinz-Uwe Haus) 博士が教えに来て、私も国際演劇研究所長と言う立場から、又、二人とも外人で同じ米国の大学で国際演劇という分野で教えていると言うこともあり、親しく交際することになったからです。その頃はまだベルリンが東西に別れ、その東ベルリンからこのハウス博士が、非常に早い頃に米国に出てきたと言うので、大変なことであったようです。彼は私より五歳は若いと思いますが、学問的にも演劇分野の活動でも、私を楽に上回る仕事をしてきています。彼が米国訪問したのは一九八五年ですが、例のベルリンの東西を分けた壁が除かれたの

3. イニアデスでの演劇活動

一九八六年の夏に、ハウスがサイプラス (Cyprus) (キプロスとも呼ばれています) の友人のニコス・シアフカリ (Nicos Shiakalis) とひょう、サイプラスの ITII (International Theatre Institute 国際演劇協会) に関係ある演出家と協力して、シアフカリスが前に関係した、ギリシャの紀元前四世紀頃に造られ使われた、ギリシャ中部のイタリアの南部に広がるイオニア海に面するケアロニア島、その東のイサキ島などの東になるギリシャ半島の南西の端になる、山の上のイニアデスと呼ばれる昔の要塞の一部に立てられた劇場を使って、国際古典演劇研究団 (IWS C International Workshop and Study Center for the Ancient Drama) なるグループを作って、先ず古典演劇の研究と称してアメリカ、ヨーロッパ (主にドイツと英国から数人) からの若い演劇人や、演劇専攻の学生を集め (総勢一二名)、それに私やもう一人の米国大学の演劇教授の一人と、皆ハウスが関係したグループで知り合い、彼の仕事ぶりに興味を覚えた者達が、彼の新しいギリシャ劇作りの仕事に参加するために、このギリシャの片田舎のもう何百年と使われたことのない古典野外劇場で、ソホクリスの「アンティゴネ」を作り上げるために集まったわけです。

この一年目の八六年には、七日間をかけてコーラス (合唱団) の動きや、中心人物の演劇的育成に力を入れ、又ブレヒト的な然し新しい融合成分と言ったものを作り出すための団体訓練に励みました。集まった米国の俳優の一部が、日本の鈴木忠志の新しい演出観と俳優修業を経験しており、私もその影響を多少受けたところがあるので、そうした要素と、私の能狂言、歌舞伎の経験などを交え、更に、私が一九七九年にはじめた心身統一合気道の要素などを取り混ぜ、リハーサルを始めにはいつもそうしたものを取り入れて、心身融合の訓練に励み、その後で「アンティゴネ」の稽古に入ると言った日課でした。私の役は、そうした朝の身体訓練を指導すること、合唱団の動きや台詞廻しに

一つの型を作るべく、皆をリードして稽古に励むことでした。

毎日の日程が一杯になるくらい、いろいろやることがあり、七日間という稽古期間はあつという間に過ぎてしまいました。最後の二日間は研究的な集まりを持ち、土地の者や近辺の学者、演劇人なども交えて、いろいろ意見を交換し、またキャストのデモをしたりして、我々がどのように古典ギリシア劇を作ろうとしているかを紹介しました。そしてアテネに戻る前の日に、ギリシアの古典劇場で有名なデルフィを皆で訪れ、深い感銘を受け、其の翌日の一日をアテネで過ごした後で、それぞれ帰国しました。ハウスの豊かな指導力とエネルギーも特別ですが、それを受け入れてあつという間に一つの劇の基盤作りにも成功した、若い俳優達の才能とエネルギーにも、感動しました。

この「アンティゴネ」の一年目の参加者の大部分の者が、翌一九八七年の六月一日に、又この野外劇場のある麓の町であるカトヒに戻り、その一ヶ月を掛けて、数人の新参加者があつたにも拘わらず、八六年に作られた基盤の上にも、更に洗練された作品を作り出して、それをイニアデスの舞台で二七、二八、二九と三日間公演しました。ここでのリハーサルや公演は、総て日中に行い、そうした施設がなかったこともあつて、照明とか音響効果とか言うことを考えずに済ませました。然し衣裳なしというわけには行かないので、幸い土地のおばさんの一人が、簡単な古典的ギリシヤ衣裳を作ってくれて、これで公演をすませることが出来ました。このイニアデスの舞台は、今では照明の設備、キャストが衣裳を変えるための簡単な小屋も出来て、随分便利になりました。

さてこの公演中に、更にシンボジウムをもって、アテネや近辺の演劇人、知識人などを交え、学究的な意見を戦わし、またデルフィを訪れ、イニアデスより更に海辺に近い所にある、昔の港であつた古跡を案内して貰ったりした後で、七月五日にギリシャとトルコの間にあるサイプラス島まで、劇関係者が皆で飛んで、こここの二箇所の野外劇場で公演しました。これはシアフカリスとサイプラスのITTIの招待でできたことで、サイプラスのリマソルとシアフカリスの出身地であるニコシアの野外劇場で、二晩公演しました。最初の夜には我々が使う野外劇場が他の催し物を

していて十一時まで使えず、それから翌朝の二時まで、公演の準備をしたり、稽古をしたりしました。我々のした、飛び入りの催し物が、思った以上の人を集めることにも驚かされました。どっちかと言えば、文化活動では田舎的なサイプレスで、主に外人によつて構成された劇団が来て、英語で「アンティゴネ」をやるということで、どんなものなのか見てやろうと言うこともあつたかも知れませんが、シアフカリスがITIIのメンバーで、その組織の後援があつたことも、見逃せないでしょう。

サイプレスがギリシャとトルコの二つの国に分けられて、ギリシャ側のニコシアでその国境を訪れたときに、国連の兵隊がその国境を守つていて、私がこの珍しい光景を写真に撮ろうとしてカメラを出したところ、「写真を撮つてはいけない」と国連の兵隊に、英語で怒鳴られたのを憶えています。

4. 私のこの初めてのギリシャ劇のためにした仕事

この八七年の実験的なプロダクションでした私の仕事は、演出者の一人として、俳優に特別な訓練をし、只観念的な理解に頼るだけでなく、古典ギリシャ劇が今日の理解度を持ち、今の発展した演劇観をもつて創作され上演されたときには、コーラスの動きが舞踏的な美しさを持ち、その台詞が音楽的な、合唱の要素が強いものであつたことを再確認し、それが実際の様な形で、動きにまた台詞に応用されたのか、一応文献には残つてはいても、実際にそれをしっかりと受け継ぎ、今日まで伝えてきた課程は、日本の能や歌舞伎と違って、全然残つていないわけです。二〇世紀の始めに、実験的にそうした試みをしてみた演出家もいたのですが、そのやり方がしっかりと残されたということもありません。

そこで私のはしたことは、歴史的に信じられている一二名の合唱団（男女別或いは混合して）を作り、そのメンバーが入場、出場とか、劇中のある場面など、グループとして動いたり、台詞を同時に言つたりする場合には、いわゆる

コーラスとして、同一の動きを一行になつたり、グループに分かれたりして動くようにしました。この動きの振り付けは、それなりに難しいところもありましたし、いったいどんな風にしたらよいものか、私も見たこともないことをやるわけで、いろいろ考えさせられました。結局能の脇のグループが三人で又はもつと大勢で、一緒に動いたり、台詞を合唱的に言うことに思いあたつて、私もこの一二名のコーラスを一行に並べて登場させ、その折りに自己紹介的な台詞を皆で合唱するように言わせました。この舞踊的な動きや音楽的な台詞の言い方は、丁度私が「船弁慶」の前シテである静が謡う「クセ」の「然るに勾踐な：」の部分の節を思い出して、それを合唱団の入場時の台詞にあてがい、その入場の際の歩行にも又舞的な手、身体の動きにも、この「クセ」の動きを当てふつてやらせてみると、それがまるで紀元前四世紀にもそうしていたかと思われる位に、ピツタリと合ひ、私だけでなく、それをやらされてゐる合唱団の連中も又そのピツタリ具合を喜んで、快く行動に移してくれました。こんなところの適合性を見出し、利用し始めると、又いろいろそうした関連が次々と出てきて、私の限られた能の動きや台詞廻しをあれこれ、ギリシヤ劇に当てはめることができたわけです。

そしてこの合唱団の台詞や動きがきまることによつて、更に主な人物で悲劇の中心者であるアンティゴネや、その他の主な人物の台詞廻しや動きもそれなりの味のあるものに決まつて行き、毎日少しずつ全員の台詞や動きができて、最終的には一応統制されたスタイル(様式化された)で、台詞にも動きにもある共通性を持った、然しリアリスチックなスタイルではないが、それを基盤して作られた、劇としての風格ができたわけです。

5. サイプラス再訪問

そしてその翌年、八八年、三年目の夏には、始めからサイプラスのニコシアに集まり、その野外劇場で皆が着いたその夜からリハーサルを始め、翌日の午前中もそれを続け、午後一休みして、その夜は初公演を始めるといふ、強

行軍をしました。アンティゴネを演じた主役の女優は同じ人でしたが、中には初めて参加したと言う俳優も二人いました。その連中は前任者から詳しく稽古をつけてもらってきていたので、一夜漬けのリハーサルで何とか皆に交じて、無事に劇を終わらす所まで出来た次第で、これも驚きものでした。ニコシアで幕開けをしてから、毎日違う地方都市を訪れ、それぞれの野外劇場で公演をしました。西のはずればパフォス、東のはずればシエクスピアの「オセロ」に出てくるファマグスタ、その二つの都市の間に位置するラナカ、リマソルでも公演しました。特にリマソルの野外劇場は舞台の背景が地中海と言った具合で、ギリシャ劇の大きさがこの雄大な舞台に真に適合して、素晴らしい効果を上げていました。

合計九日間の公演日程を無事にこなしましたが、サイプラスの二、三の地中海を背景にした、豪華なギリシャ古典劇場は、ギリシャが地中海を股にして活躍していた時代に、自分たちの楽しみのために作り上げた劇場で、その由緒ある劇場を使って、この国際的なグループである私達が、有名なギリシャ劇を英語でやり、それを土地の人達や観光客が見に来てくれるという、真に驚くべき経験をしたわけです。若い俳優達は、公演後直ぐ帰国してしまいましたが、私は演出家のハウスと二人、サイプラスのITIIのメンバーの一人の方の世話で、三日ほどその人の、海辺の休暇用のアパートを使わせてもらい、思いがけない骨休みをさせてもらってから、米国に帰りました。

この二〇〇五年に、私と家内は米国の小さいグループでのトルコ（ターキイ）への観光旅行をすることがあり、トルコの南部の海辺の中心にあるアンタリアと言う大きな市から、南東の方向に位置するサイプラスが、海上にぼつんと浮かんでるのを見て、懐かしい思いをしました。

6. ベルリン訪問

このギリシャやサイプラスの経験を更に意義深いものにしたのは、八七年のサイプラスの仕事の後で、ハウスの招

待てまだベルリンが東西に分かれているときに、そのベルリンの東部を訪れ、その後、カンサス大學に教えに来たことのある友人を訪ねながら、チェコスロバキアのブラハ(又はブラーグ)を訪れ、更にポーランドのワルソーまで、ずうっと汽車の旅をし、共産圏にいるという緊張感がワルソーを去るにあたって、米国の外国路線専門のパン・アム機に乗って、やっとこれで米国に帰るといふ安堵感に変わっていくのを強く感じさせられたのを憶えています。既に横道にそれているのに、それを更に深めていくように申し訳ありませんが、その共産圏のヨーロッパを訪ねた、数少ない日本人(在米中の)として、非常に稀な経験をしたと思えますので、ここでそのことを報告させていただきます。

ベルリンを東西に分けていた例の有名な境界が除かれたのは、一九八九年の一月でしたが、私がその境界のシンボルになっていた、有名なブランデンバークの門をその東側から見たのは、一九八七年の七月でした。サイプラスを出て、アテネに立ち寄ったのが七月一二日から一四日、そこを出てドイツのフランクフルトに戻り、西ベルリンに飛び、着陸して直ぐ東ベルリンに入るべく、有名なチャーリーのチェックポイント(東西ベルリンの境界)へタクシード行きましたが、友人のハウスは、私が電車で来ると思つて、東ベルリンの駅で待つていてくれていたわけです。サイプラスを出る前に、この辺のことをもつとはつきり相談していたら良かったのですが、二人ともそれをせず、ハウスはどうと言うこともないと思ひ、私はそんな面倒なことはないと高をくくつて行つたので、偉い目に遭つてしまいました。東ベルリンに入るための正式な書類を持つていなかつたために、私の方は、東ベルリンのITIを訪ねるために来ていると言うことを、やっと納得させて(余り英語が通じないと言うこともあり)、通してもらひ、ITIに電話をしようと思うのですが、その時の東ベルリンでは、チェックポイントの近辺に公衆電話がないので、重い荷物を引きずつて、三ブロックは離れたあるアパートの公衆電話をやつと見つけて、さて掛けるときになつて、私の持っている西ドイツのコインは、東ドイツの公衆電話では使えないことが分かり、丁度そこに居合わせた、東ドイツの男が、コインを変えてくれたので、何とか連絡が付き、二〇分ほどして、ITIから迎えが来てくれて、ほつとしましたが、

その時の東ドイツの国境を守っていた兵隊の融通の利かない、ルール一点張りの恐ろしい態度には、全く参りました。

この時は西ベルリンの飛行場から国境まで、タクシーで西ベルリンを通ったのですが、西ベルリンの感じなどを見ている余裕が全くなく、何年か後になって西ベルリンを見て、東ベルリンが何も大都市らしい賑やかさとか、活気などが無い、むしろ不気味なくらい静かで、住んでいる人もきちんと総てルールを守って、毎日を過ごしているという感じで、この雰囲気、後で行った東側の大会のブラーグとかワルソーなどでも同じような具合で、ちょっと気味が悪ような感じを受けたのを憶えています。

東ベルリンでは I T I の世話で国立のベルリン・ホテルに泊まり、二二日にチエコスロバキアに移るまで、八日間ここで過ごしました。I T I があてがってくれた、英語と日本語も一応出来る男性の通訳が、毎日いろいろなところに案内してくれて、助かりました。勿論ハウスの招待で彼の家を訪ねましたが、劇を見たり、あちこち見物に歩くのは、総てこの通訳が案内してくれて、大いに助かりました。ここで後で訪問するポーランドに入るために、そちらの総領事館へ行つて、ビザを貰つたりしましたが、その前に寄ることになっているチエコスロバキアの方は、全然ビザなどうるさくなく、同じ東側でも、これ程違ふのかと驚かされました。いろいろ細かい見物話もしたいのですが、本論からはずれるので、それは避けて、後二、三の点を付け加えます。

ベルリンには、有名な劇作家のブレヒトが住んでいた家が博物館になっていて、そこを訪れ、能面が三つ壁に掛けているのに感銘を受けました。ドイツで迫害されたユダヤ人の墓場があつてそこを覗いたり、有名な立派な宮殿を見たり、演劇も二度ほど見ましたが、特に感心することもありませんでした。ハウスの田舎の家のある、ベルリンから三時間ほど汽車で出たところでは、まだロシア軍が駐屯していて、町の良いところは皆彼等が使つていたり、第二次世界大戦中にドイツの女の犯罪者を収容した監獄が残っていて、見物できるようになっていたり、変わったものも幾つか目にするがありました。

7. ベルリン訪問の後で

七月二日に、朝、汽車で東ベルリンを出て、六時間ほどで、チエコスロバキアのプラークに着きました。ここにはマリナ・ジャロスラフ (Malina Jaroslav) という、カンサス大學の演劇科に教えに来て知り合った舞台装置家が住んでいて、彼を訪ねて、二五日まで四日間、プラークの見物(ここにも古いお城がありました)をしたり、劇を見たり、この友人の田舎の家を訪ねたりしましたが、古い大都会であるプラークに、住みたい人総てを住まわせるだけの家がなく、法律的には、一家でプラーク市内に一軒以上の家を持つことが許されていないということでしたが、彼は自分の仕事場ということで、市内に小さなアパートを持ち、私はそこに三泊させてもらいました。ところが、あいにく浴室の水道が故障していて、それを直すのに水道屋が来る順番を待たなければならぬそうで、私はシャワーを取るために、同じ通りの向かい側に住む彼の友人の家に行つて、取らせて貰いました。共産圏に住む人達のちよつと信じられないような、不便さを経験しました。ここはどちらかと言えばこじんまりした都市で、東ベルリンなどのそれなりに都会的な感じは、余りありませんでしたが、それでも落ち着いた感じの、親しみやすい所でした。

二五日にはプラークを夕方汽車で出て、一晚掛けて、隣のポーランドのワルソーを訪ねました。プラークとワルソーの間は、ベルリンとプラークの二倍近くあります。乗客の様子を見ると、国境近くに住むポーランド人が、もつと物質の豊かなプラークに買い出しに来ているようで、大きな荷物を持ったポーランド人が、国境を越えると、次々と汽車を降りて行くのを見ました。第二次世界大戦後の日本人が、東京から二、三時間掛けて田舎に出て、米とか野菜などの買い出しに出かけたのを思い出します。私も、中学三年生で、そうしたことも何回かしています。ポーランド側の国境の取締は、外人に対して特にうるさく、私の場合、男の移民官が「お前は何しに来たのか?」といった見下した感じで、私の米国のパスポートを何回もひっくり返し、おっ繰り返して見て、私が前に訪ねた国々の入国許

可の判子を見てみたり、余り質問はしないのですが、凄く感じの悪い取り扱いを受けました。

チッコスロバキアに入った時には、女の移民官で、「良くいらつしやいました」と言つた感じを受けたのですが、ポーランドに入るときには、こんなに違うのかと驚きました。一回中に入つてしまえば、一般のポートルランド人はそうしたうさんくさい目で見ると感じるような感じは受けませんでした。ワルソーではカンサス大學に來たことのある日本文化専門の学者がいたり、日本人で、カンサス大學で教えていて知り合つた、私の友人の又その友人と言つた人がいたりして、その人達がいろいろ案内して下さつたり、自分のアパートに住まわせて下さつたりして、居心地は最高でした。

ワルソーでも宮殿を見に行きましたが、ここは改築中ということもあり、他の所と違つて手入れが不十分で、余り見栄えがしませんでした。この市の野外劇場でシエクスピアの「真夏の夜の夢」を見ましたが、七月二六日というのに丁度雨が上がつた後と言ふこともあり、夜のために寒いくらいでした。市の中央にある広場に面した家の一軒が、映画の「キューリー夫人」にも出た、彼女の住んでいた家で、そのままそっくり残されていて、中に入つてキューリー夫人がそこにいるような雰囲気があつて、楽しむことができました。この映画は、多分東京の新宿で、まだ私が大學生だった頃に見たように憶えています、グリア・ガースンの美しいキューリー夫人の姿を未だに憶えている感じが、です。

滞在の最後の日に（七月二八日）、カンサス大學で教えたことのあるこの教授の上司になる人の世話で、私が日本の古典演劇の話を実演入りでする機会を与えて貰いました。結構三五名位の人達がきてくれて、面目をほどこしましたが、例によつて、床の掃除が充分でなく、私の白足袋の底が終わつたときには真つ黒になる始末でした。

翌二九日、ワルソーの飛行場を出て、ニューヨークに飛ぶパン・آم機で米國に戻り、三〇日には無事帰宅しました。五月三〇日に家を出て、二ヶ月後に帰宅という、長いいろいろなことがたつぷりあつた、東ヨーロッパへの初めての旅でした。

8. 東ヨーロッパから 西ドイツへ

私とハウスの演出面での協力活動が、ギリシャからサイプラスへ発展し、彼の住む東ベルリンへの旅が、プラーグからワルソーまで進展し、私のヨーロッパ経験が思いかけずに広まり、深まったところに、又更に彼に協力する仕事で声がかかり、今度は西ドイツに何度か行くことになりました。仕事の対象はギリシャの古典劇ではなく、もつといろいろ種類の違った劇と取り組むことになりましたが、彼の私に期待するところは同じで、様式化できるところをそれなりに演技にあてがい、リアリスチックな演技形式から、皆を抜け出させることに協力することでした。それはカンザス大学ですでにやっていた、能や狂言の小舞を舞ったり謡ったりすることを基本訓練として教え、その歩き方、手や身体の動きをコントロールすること、発声に謡った感じをつけることなどを教え、身につけさせ、それが稽古を重ねることによって、基本的な動きや台詞廻しのスタイルとして、全員の舞台での表現の共通性として確立されるわけです。

先ず一九八九年の一月に、西ドイツの南西でフランスとの国境に近いカイザースラウテン (Kaiserslautern) の公立劇場でのシエクスピアの「ハムレット」に協力し、群衆の動きや、身振りなどの振り付けをし、その翌年の一九九〇年の五月には人形劇の主人公のピノキオが町中の人々を担ぎ出して、いろいろなことが起こるという劇で有名な北海に近いブレメン (Bremen) に行き、俳優のために能狂言の動きや、台詞の調子をどう使うかというワークショップをし、そして一九九三年の九月には、西ドイツの南西になるベルジャム (Belgium ベルギーとも呼ばれる) とドイツに挟まれた小国のルクサンブルグ (Luxembourg) の国境に近いトリア (Trier) でアーネスト・トラー (Ernest Toller) とごう第一次世界大戦後の作家のカルデロン・デラ・バルカ (Calderon dela Barca) の「大世界劇場」(El gran teatro del mundo / Das Grosse Welt theatre 約一六四五年頃の作) の上演で、ごつものように動きの振り付けの指

導をしました。

これらの劇の上演は使用された言葉が総てドイツ語で、私の到らない語学力では発音に調子を付けると言ったことはできないので、それは英語ではこんな風にするのだが、自分たちでドイツ語ならどうなるか、やってみてくれと言ったことで、試して貰いましたが、勿論中途半端なものになってしまい、まあまあ動きの振り付けで多少の面白さを加えたと言った程度のものになってしまいました。

9. ハウスのカンサス大學での仕事

ハウスの演出に私が協力するという仕事で、この西ドイツでの幾つかのプロダクションを通して、ますます順調に良い効果を上げるようになったところで、ハウスに一回カンサス大學へきてもらって、本格的な演出の仕事をして貰ったかどうかと言う話になり、私もその仕事に手を貸すということで、丁度大學の外国人訪問教授というカンサス大學の特別な地位がもらえることもあって、一九九一年にこちらに来て貰って、ブレヒトの「アルツロ・ウイの抑えがたい出世話」(The Resistible Rise of Arturo Ui)の演出をしてもらうことになりました。勿論この訪問の結果は予期された好結果をもたらしましたが、大変象徴的なそのおまけ話が出来たので、それを披露します。

この訪問の時に、ハウスは一学期間こちらにとどまることになっていて、演出の仕事以外に、大學のクラスを教えたりしたわけですが、大學に所属する家を一軒そっくり使わせてもらえると言う好条件があったりしたので、奥さんはお医者さんで、仕事を中止して来られなかつたのですが、高校生だった息子を一人連れて参りました。その息子は、一応既に英語は出来るようになっていたのですが、一学期間土地の高校へ通うことになって、英語の進歩が著しく、今もその強みを保持していて、お父さんのハウスが英語で書く本とか、研究発表のペーパーとか、そういったもの一切を、お父さんが書いた後で読み、校正する仕事を引き受けてやっています。ハウスが一学期間ここで教えられたと

言うこと以上に、思いがけないおまけが付いて、嬉しい結果が得られました。

10. 総てが上手くいくとは限らないと言うこと

私の外国ずいた話のもう一つは、一九九二年の日本の富山市で行われた国際素人演劇協会の演劇祭に、私のカンザス大學関係者を指導して演出した二つの狂言のプログラムを上演した折りに知り合った、ハンガリーのドブリツエン (Debrecen) という、首都ブダペスト (Budapest) に次ぐ大都市の国営の劇団であるチヨコナイ劇場のリーダーをしていた、イスタバン・ピンチエズ (Istavan Pinczes) と知り合ったことです。一九九三年の一二月中旬から翌九四年の一月の第一週が終わる頃までの三週間程の時間を作つて、ピンチエズの演出した「運命の子ども達」と名付けた、ギリシャの古典劇作者エチパスの書いた、有名な登場人物であるアンティゴネとその家族が出てくる新作の劇で、私は例によつて、能や歌舞伎の動きや台詞廻しを適当に当てはめて演出に色づけしたわけです。

新年になつてから公演が始まるわけで、私はそれまでの短い期間に出来るだけのことをしました。クリスマスの休みで、一二月二四、二五日と稽古も休みになり、何もすることのない私は、汽車で四時間程になるブダペシュトまで戻つて、この二日の休みを一人で過ごしましたが、いつもいろいろ人出の多いこの大都市も、シユンと静まりかえつていて、二四日の日か、クリスマスの買い物をしている人達に交じつて商店街に出て、ドイツ製のいかにも暖かそうな、然し軽くできている冬物の半コートを一つ見つけて、それを一つ買ひ求め、未だに重宝して使っています。

ここでの公演が開く前に、新聞記者から私が何をしに来ているのかと言う質問を受け、日本の能や歌舞伎に見られる人物の言いたいことを身体で、又その俳優の声調で、強弱や上がり下がりをつけ、表現を豊かにする方法を、この新しいギリシャ劇に応用する仕事をしていると説明したわけですが、その時には何も言わなかつた記者が、劇評を書いたとき(これは私が帰つた後で送られてきたもので知つたわけですが)日本の古典演劇が使っている劇的な表現

方法をギリシャ劇に 응용して、どんな利点があるのかと言った、大麥皮肉っぽい理論で劇評をしているので、どこかテクニクを応用したにしても、その表現しようとしていることが、より効果的に表されているならば、これを由とする見方が出来ない論評にがっかりしましたが、後にも先にも、こうした調子で批評されたことはこのときだけであつたのは、不幸中の幸いとも言えるかと思ひます。

これで私のヨーロッパに關係のある仕事のレポートは終わりますので、次号からは未だ残っている、私と日本の古典演劇との關係に戻つて、話を続けさせて貰います。

(米國・カンサス大學名誉教授)